

天理市成願寺町

# 成願寺遺跡

一下池の護岸工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要一



下池山古墳と下池の全景（西方から）

2004

天理市教育委員会

## 例　　言

- 1、本書は、天理市教育委員会文化財課が、奈良県天理市成願寺町下池において、実施した埋蔵文化財の発掘調査の概要報告書である。
- 2、本書は、近畿農政局大和平野農地防災事業所が実施する土木工事に伴い、実施した埋蔵文化財調査である。
- 3、調査は、近畿農政局大和平野農地防災事業所長が発掘届け出を提出し、奈良県教育委員会教育長の通知を得て、奈良県文化財保存課の指導により天理市教育委員会文化財課が現地調査を実施したものである。
- 4、調査に際しては、近畿農政局大和平野農地防災事業所・公務官三好孝之氏と協議の上、発掘調査を行い。株式会社尾田組土木建築部加納五男氏、及び地元の方々の協力を得た。
- 5、発掘調査並びに本書の作成は、天理市教育委員会文化財課、技術吏員松本洋明が行った。

# 成願寺遺跡調査

所在地：奈良県天理市成願寺町下池

目的：ため池改修工事に伴う事前の文化財調査

調査機関：天理市教育委員会

調査期間：平成15年11月28日～平成15年12月16日（第1調査区～第5調査区）

平成16年2月9日（第6調査区）

## （1）はじめに

奈良県天理市の中央部、JR西日本・桜井線長柄駅から南東1.20kmに下池山古墳が所在する。下池山古墳は、全長120mの大形前方後方墳で、西殿塚古墳、東殿塚古墳を中心に関連する大和古墳群を構成した大形古墳の1基である。平成7年度～平成8年度にかけて奈良県立橿原考古学研究所と天理市教育委員会によって同古墳の学術調査が行われ、竪穴式石室から割竹形木棺が見つかり注目された。既に盗掘を受けていたが、主石室の北西側から小石室が検出され径37.6cmの大形内行花文鏡も出土し脚光を浴びた。

近畿農政局では、農地防災事業としてため池改修工事を進めている。平成15年度事業として下池山古墳の西側にある下池について、ため池の南側堤の改修工事を実施することになった。下池山古墳に接し、ため池が広く成願寺遺跡に含まれるなど、護岸工事では遺構が見つかる可能性があり、発掘調査を実施したものである。調査方法は、下池の南側堤に沿って池の内部に調査区を設定し、遺構が確認されれば堤に沿って全面調査する予定であった。調査方法は、護岸工事を行う下池の南辺に沿って調査区（第1～4・6調査区）を設定し、重機と作業員を得て遺跡調査を実施した。また、ため池の送水口である分水路の護岸工事についても試掘（第5調査区）を行った。

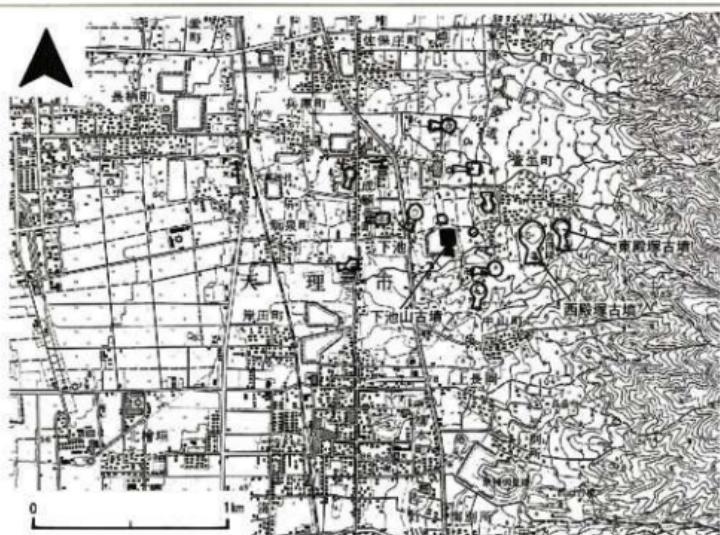


図1 成願寺遺跡の位置図 (S 1/25000)

## (2) 調査の状況

### a、下池南堤岸の調査

南堤の内側に沿って、第1～4・6調査区を設定した(図2参照)。残念ながら遺跡に関わるようない造構、及び遺物包含層はなく、池底に堆積した土壌の直下から地山が出土した。図3は、南側堤の調査区から検出した柱状土層図である。標高87.5mの水準で池底の堆積土壌の上面を検出し、古墳側に近い第1調査区から中央部付近の第3調査区にかけて、標高87m前後で地表面を検出した。しかし、底面の地山直上は、ため池による二次堆積土壌で覆われていた。図3の断面図に示した粘質や砂質の土壌は池底に堆積した土砂を示す。検出した地表面は、下池山古墳の裾から第3調査区付近まで同水

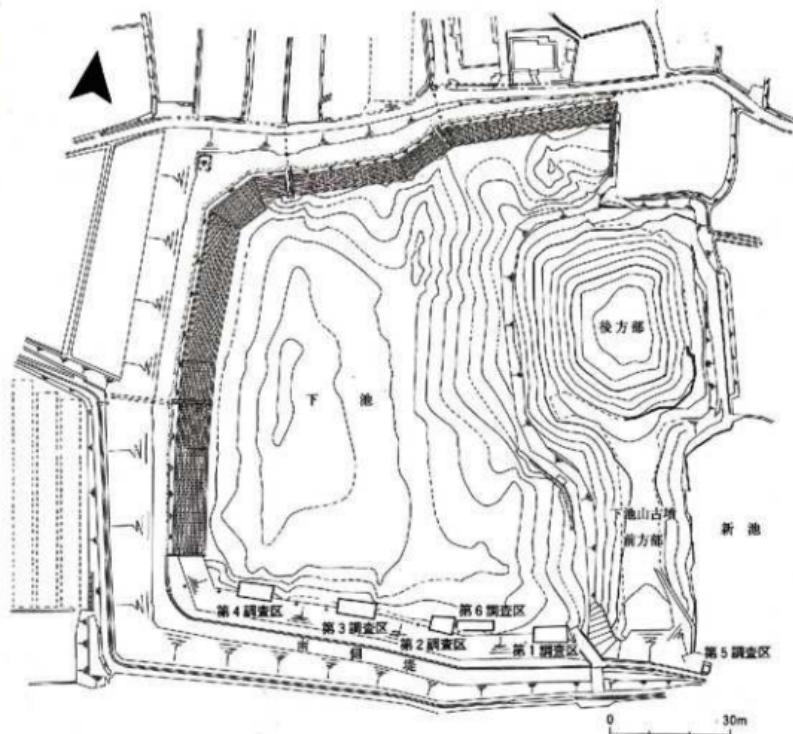


図2 ため池調査区配置図 (S 1/1200)

準で展開し、南側堤の西端に設定した第4調査区では、地山面が深くなり地山を検出していない。下池の西方は、地形に従って地山が落ち込むようだ。なお、地山上面には遺跡に関わりをもつ旧地表層が残っていない。ため池を造成する際に、池底を削平していたことが考えられる。池底に堆積した二次堆積土壌には、近世の茶碗の破片が出土し、下池の拡張工事が近世末期に行われたとする事実関係を示唆するものかもしれない。

### b、新池付近の水路工事

下池山古墳の東側にある新池の南側堤に面して、下池に送水する分水路がある。工事では分水路の造り直しをするため、工事の掘り方に従って新池の堤をおよそ50cmほど掘り込んだ。しかし、既設の水路工事の際に受けた掘削の痕跡を伴い、古墳に関わる遺構は見つかなかった（写真6）。

### c、調査区の規模

第1調査区  $9\text{ m} \times 4\text{ m} = 36\text{ m}^2$

第2調査区  $5\text{ m} \times 4\text{ m} = 20\text{ m}^2$

第3調査区  $10\text{ m} \times 4\text{ m} = 40\text{ m}^2$

第4調査区  $10\text{ m} \times 4\text{ m} = 40\text{ m}^2$

第5調査区  $1\text{ m} \times 2\text{ m} = 2\text{ m}^2$

第6調査区  $9\text{ m} \times 4\text{ m} = 36\text{ m}^2$



写真1 第1調査区北壁土層



写真2 第6調査区北壁土層

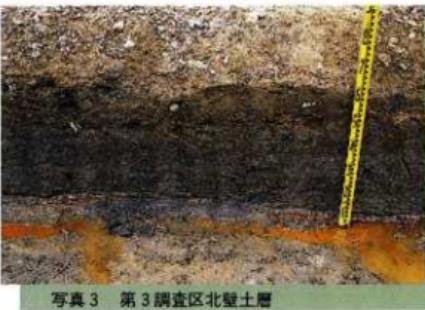


写真3 第3調査区北壁土層



### (3) まとめ

下池山古墳の西側に広がるため池の護岸工事に伴って、事前の文化財調査を実施した。調査地点は下池の南側堤に沿った地点だが、結果はため池の底面を削平していたため、遺跡に伴う地層が残っておらず下池山古墳を含め古墳周辺の立地や景観復元など、十分な情報を得ることはできなかった。池底の削平は、前方部付近に設定した第1調査区まで及んでおり、下池山古墳の墳丘裾までため池に伴う掘削が及んでいるようだ。なお、安政6年成願寺下池の拡張略図(図4)に示された図面には池の内部に南北に延びる古道があり、古道と下池山古墳との間に下池の古床が示されている。これが下池山古墳の西側にあった濠の痕跡で古道が濠の外区画を示すものだとすれば興味深いことだが、調査では池底が削平を受けていたため遺構として判断できるものは無かった。近世の略図に示された古床と古道が濠の区画として考えた場合、現在の下池には濠の痕跡が既に池底の削平によって消滅し残っておらず、調査で検出した地山面よりも上位に濠の底面が存在していたことになる。また、平成8年度に実施した下池山古墳の前方部南側の調査では、谷地形とそれに伴う地山面を標高91.5m前後で検出している。下池の南側堤に沿って検出した地山面が標高78m前後だとすれば、前方部先端の地山面とは3.5mの違いがあることがわかる。下池山古墳の西側一帯は、古墳が築造された当時、現在の池床よりも地盤が高く形成されていたのではないだろうか。



写真4 第6調査区全景（東方から）



写真5 第2調査区全景（西方から）



写真6 第5調査区・新池の堤（東方から）

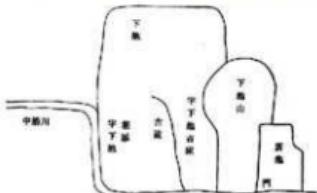


図4 安政6年成願寺下池の拡張略図

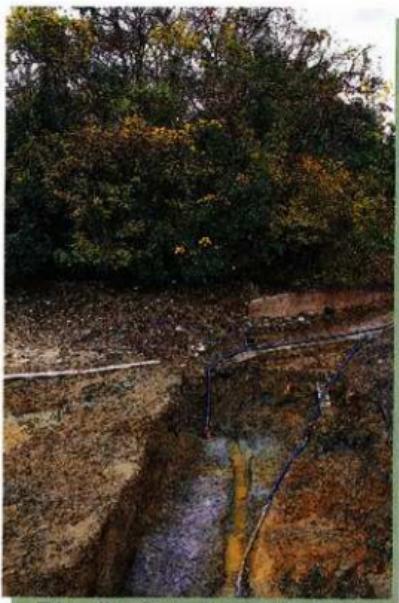


写真7 第1調査区と下池山古墳前方部(西方から)



写真8 第1調査区全景(西方から)

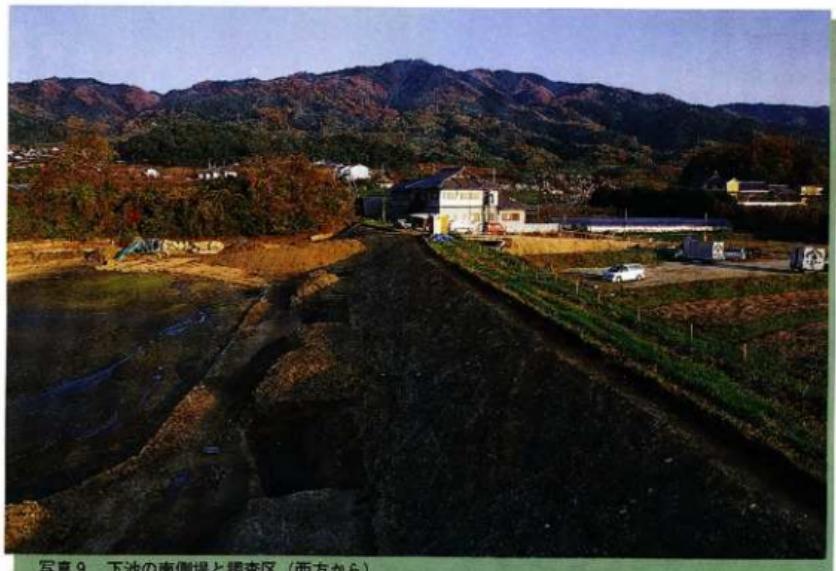


写真9 下池の南側堤と調査区(西方から)



下池と下池山古墳全景（西方から）

---

## 天理市成願寺町 成願寺遺跡

—下池の護岸工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要—

平成16年3月 発行

編集 天理市教育委員会 〒632-0016 天理市川原城町605番地  
印刷 株式会社 天理時報社 〒632-0083 天理市稻葉町80番地

---